

新約聖書 マタイによる福音書1章18節—25節(新共同訳)

¹⁸イエス・キリストの誕生の次第は次のようにあった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。¹⁹夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。²⁰このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。²¹マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」²²このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。²³「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。²⁴ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を迎える、²⁵男の子が生まれるまでマリアと関係することはなかった。そして、その子をイエスと名付けた。

※第1朗読と第2朗読は末尾に掲載

説教「キリストの誕生」

「自分の行為は世界に響いている」という哲学者ニーチェの言葉があります。それは、私たちのどんな些細な行為も無意味ではなく、周囲に、世界に、影響を与えていたという意味です。

私たち一人一人の行動は水面に投げた小石のように、必ず何らかの影響を他者に、世界に及ぼしていくということです。

それは、自分の行ったことへの目に見える反応が何もない場合でも、そうなのだと思います。知り合いのある方が、希望を失い、絶望的な気持ちになっていた時、家のポストに入っていた近所の教会の案内チラシに書かれていた聖句を目にして、パッと心が救われたという話を聞いたことがあります。

かといってその方は、その教会に連絡をしたわけではありませんでした。案内チラシを配った人達は、頑張ってポスティングをしたものの、どこからも何の反応もなく徒労に終わったと思っていたかもしれません。しかし、決してそんなことはなかったのです。

「自分の行為は世界に響いている」ということについて、ニーチェはこのように述べています。

「自分のどんな行為も、他の行為や考え、決断などの誘因になっている、もしくは、大きな影響を与えている。その行為がまったく何にも影響を及ぼしていないことはない。自分の行為によっていったん起きた事柄は、いつもなんらかの仕方で次に起きる事柄としっかりと結びついているのだ」。

今日はクリスマス主日です。本日の福音書は、イエスの誕生にまつわる、父ヨセフの決断と行動が記されています。

当時のユダヤ社会での婚約とは、夫婦となることと法的にほぼ同様の重みがあり、その婚約期間は約一年でした。ヨセフがマリアと婚約をし、まだ一緒に生活していなかった一年の間に、マリアは聖霊によって身ごもったのです。

ヨセフが戸惑いながら決心したことは、ひそかに離縁することでした。不貞を働かれたという疑惑におけるマリアへの拒絶感もあったでしょう。また、表ざたになれば、当時の慣習によって、マリアは姦淫の罪で石打ちになり殺されなければなりませんでした。しかし、ヨセフはそうしたくなかったので、表ざたにせずひそかに離縁する道を選んだのです。

ヨセフの戸惑い、苦悩は深いものであったでしょう。そのヨセフに、神の意志が天使を通して伝えられました。その神の意志とは、マリアに起こったことは神のわざによるものであるのだから、恐れずにマリアを妻として迎え入れるようというお告げです。そして、ヨセフは神の意志に従いました。

天使の指示に従ってヨセフがマリアを妻として迎え入れ、イエスを自分の子供として育てる決断は、ヨセフ自身も救われるものであったと思います。ヨセフには、マリアが石打ちによって殺されないように、表ざたにしないという温情がありました（ルカ 1:19）。しかしそれでも、その状況でマリアを離縁することは、マリアと胎児を見捨てることであったでしょう。

ヨセフは心優しい人であったと思われます。マリアをひそかに離縁して問題を解決させたかのようでも、その負い目はヨセフの心に残り続け、のちの人生においてヨセフは苦しみ続けなければならなかつたのではないかでしょうか。

妻マリアを迎え入れることによって、ヨセフは法的にはイエスの父親となりました。天使がヨセフに「ダビデの子ヨセフ」と呼びかけたように、ヨセフはダビデ王の子孫でした（マタイ 1:16 と 1:20）。このようにしてイエスは、法的にはダビデの家に生まれ、靈的には神の介入によって神の子として誕生したのです。

マリアとヨセフのもとに生まれた男の子はインマヌエルと呼ばれると、天使は告げます（マタイ 1:23）。インマヌエルとはヘブライ語で「神は私たちと共にいます」という意味です。「インマヌエル——神は私たちと共にいます」。これがクリスマスのメッセージです。「私」ではなく「私たち」とあります。クリスマスとは、神が共にいる喜びと希望を、人々が一緒に分かち合う時なのです。

本日の福音書には、イエスの誕生にまつわる、イエスの父ヨセフの苦悩と信仰が記されています。

苦悩の中、人間がギリギリの限界まで追い詰められた時、神の意志への従順によってそれを乗り越えることができます。

一般に、「従順」という言葉には、不甲斐ないイメージや、不自由なイメージがあるかもしれません。

しかし、神への完全な従順は、逆に人間のとらわれた心を解放し、自由にするのです。

冒頭でお読みした、「自分の行為は世界に響いている」というニーチェの言葉の初めの部分を、もう一度お読みします。

「自分のどんな行為も、他の行為や考え、決断などの誘因になっている、もしくは、大きな影響を与えている。その行為がまったく何にも影響を及ぼしていないことはない」。

周囲に、世界に響かせる自分の行いが、神の愛によって与えられた行いであることを願いながら、私たちは、日々を生きていきましょう。

電化製品は、電源が入っていないとスイッチを押しても反応しません。

私たちも、神様からの呼びかけにいつでも応答できるように、自分自身にいつも電源を入れている状態でいましょう。

もうすぐ訪れるクリスマスを、私たちは共に待ち望み、神が共にいる希望と喜びと一緒に分かち合いましょう。

お祈りをいたします。

天の父なる神様。日々、心が動搖する私たちに、愛と恵みをもって語りかけてくださるあなたの御言葉に、私たちが従ってゆくことができますように。御子の誕生の喜びに、私たちがつながってゆくことができますように。救い主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン

***** 説教ここまで *****

以下、本日に関連する聖書箇所（第1朗読と第2朗読）です。

旧約聖書 イザヤ書 7章10節—16節（新共同訳）

¹⁰主は更にアハズに向かって言われた。¹¹「主なるあなたの神に、しるしを求めるよ。深く陰府の方に、あるいは高く天の方に。」¹²しかし、アハズは言った。「わたしは求めない。主を試すようなことはしない。」¹³イザヤは言った。「ダビデの家よ聞け。あなたたちは人間に／もどかしい思いをさせるだけでは足りず／わたしの神にも、もどかしい思いをさせるのか。¹⁴それゆえ、わたしの主が御自ら／あなたたちにしるしを与えられる。見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み／その名をインマヌエルと呼ぶ。¹⁵災いを退け、幸いを選ぶことを知るようになるまで／彼は凝乳と蜂蜜を食べ物とする。¹⁶その子が災いを退け、幸いを選ぶことを知る前に、あなたの恐れる二人の王の領土は必ず捨てられる。

新約聖書 ローマの信徒への手紙 1章1節—7節（新共同訳）

¹キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び出され、召されて使徒となつたパウロから、——²この福音は、神が既に聖書の中で預言者を通して約束されたもので、³御子に関するものです。御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、⁴聖なる靈によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められたのです。この方が、わたしたちの主イエス・キリストです。⁵わたしたちはこの方により、その御名を広めてすべての異邦人を信仰による従順へと導くために、恵みを受けて使徒とされました。⁶この異邦人の中に、イエス・キリストのものとなるように召されたあなたがたもいるのです。——⁷神に愛され、召されて聖なる者となったローマの人たち一同へ。わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。

教会讃美歌 1番「いまこそ来ませ」、3番「喜べ主イエスは」、250番「つくられしものよ」、39番「マリヤの腕に」。